

福寿草

池田 隆

一週間前には全国に警報が出るほどの大雪、ここ八ヶ岳西麓でも三十センチを超えたが、数日の季節外れの暖かさですぐに融けてしまった。慌しい春の到来である。今日は陽の温もりを感じる穏やか日和である。

農閑期の田畑地帯を散策する心づもりで樹林地帯との境目に車を止め、外に出た。振り向くと森の中に向う一筋の小径が伸びている。

この樹林地帯は約一キロメートル四方の落葉松主体の森林保存地区で車の侵入が禁じられている。ただし八ヶ岳主峰を源流とする柳川の峡谷が山側の境界で、それに沿った通称「鉢巻道路」のみが冬季節間を除き車の通行が許可されている。この道は嘗て武田信玄が川中島へ直行するために築いた「棒道」の跡である。

持ち前の好奇心が湧いてきた。興味津々、森の中へ吸い込まれて行くと、滔々と水が流れる幅狭い水路に出合う。「これが世界灌漑施設遺産にも指定されている江戸期以来の用水路網の一部か」と心が弾む。幸いに水路沿いには保守管理用の小径が続いている。よし取水地点まで行ってみよう。

周囲を見渡すと冬枯れの茶一色、樹木の新芽はまだ固く、熊笹と湿地の苔類がわずかに緑の色を添えるのみ。路の臺も見当たらない。

足元に目をやると木漏れ日が射す水路の淵にキラキラと目を輝かした真黄色の福寿草が数輪咲いている。先陣を切って生命の輝きを周囲に広める女神のようだ。

都会でも時折見かけるが、パンジーなどの鮮やかな花に比べて地味なイメージを持っていた。しかし今見る福寿草は常しえの福を寿ぐという名前通りだ。先人も同じ思いで名付けたのだろう。横に腰を下ろし、雪解け水の流れを花と一緒に眺める。

水路は鉢巻道路を潜り、峡谷の真上に達する。「水神」と書かれた石碑が立っている。数十年前の水路改修工事の際に移し替えられたものらしい。此処からは工事用道路の下に埋設されたコンクリートの水路となり、上流方向へ続いている。急峻な崖を削ったその道を一キロほど進むと、柳川本流から分岐する取水口に達した。途中の路上には頭上までせり出した崖から落ちた大きな石がゴロゴロと転がっている。

人力による当初の水路開削は如何に難工事であつたろう。この峡谷斜面に開渠を掘削したのだ。大雨毎に崩壊の危機に晒され、その後の修復・保守も大変だつたであらう。

日頃、口にしているハケ岳高原産の米や野菜も徒や疎かに出来ないと思いつつ、樹林帯の縁を迂回して車に戻る。二時間の散策だったが、その間に人ひとり会わず、鹿やリスとも出合わなかった。並んで座った福寿草だけが何故か心に残る。

学生時代に今の妻と緑豊かな公園やお濠端に行つては、ベンチでよく語り合つた思い出が蘇つたのかも知れない。時計を見ると正午過ぎ、もう直ぐ妻がデイケアのマイクロバスで帰宅する時刻である。その前に急いで戻り、昼食を用意する要がある。ピザを焼き、コーヒーを淹れ、久しぶりのデッキでの食事とするか。

